桜の下の恋

秋月美杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜の下の恋

【Ｎコード】
Ｎ６７５５Ｏ

【作者名】
秋月美杏

【あらすじ】
輝（あきら）は昔、桜の精と名乗る死神に出会った。
そして年月は流れ、ある日のこと。
その死神に似た瑛（あきら）に出会い――――――――――。
はかなくも美しい恋の話です。

（前書き）

またこんな感じのものを書いちゃいました。
変かもしれないけれど呼んで頂ければ幸いです。
ちなみにＢＬ　ですが変なシーンはそんなにありません。
どうぞご覧下さい。

オレの家には代々男の子が長生きしないという言い伝えがあった。
お袋は相当気にしていたが親父はそうでもなかった。（婿養子だから・・・・）
オレも正直病弱でその日も風邪で寝込んでいた。
家の庭には綺麗な桜の樹がある。その日も桜はとても綺麗だ。
「ねえ・・・おにわのさくら・・・みちゃだめ・・・？」
お袋にそういうが、ダメの一点張りだった。
「出かけてくるから、しばらく寝てなさい。」
そうお袋はいって買い物に行ってしまった。
「ちょっとくらいなら・・・」
そういってカラッ、と戸を開けた。
なぜか惹かれてたまらない、古いさくらの樹。チラチラと降るさくらの花びらは・・・
「・・・・なんだか・・・」
「・・・・・雪みたいだろ??」
「！？」
そして・・・・その下で彼に出会った。
しろいしろい袴を着て、薄い生地で作られたベールを羽織って彼は立っていた。
顔は・・・あまり覚えていないけれど美人だった。
「あなた・・・だあれ？」
「・・・・このさくらの樹。」
幼い頃のオレには何のことやらさっぱりで、
「・・・ほんと？」
としか言わなかった。
「そうだよ。・・・輝（あきら）の命で咲くんだよ。。・・・・さあ、一緒に行こう・・・」

手が差し伸べられる。
「・・・・いや！・・・・さくらはすきだけど・・・あなたはきらい！・・・だからいかない！」
オレは拒絶した。するとそいつは
「そっか・・・じゃあまたさくらの咲く頃に・・・・ね。」
といった。すると目の前がさくらの花びらで埋め尽くされていつの間にかオレの前には誰もいなくなっていた。

＊＊＊

「・・・・っ！」
オレは慌てて起き上がっていた。
息が荒い・・・・自分でそう感じた。
なんで今になってあんな夢を見たのだろう・・・・そう思いながら時計を見ると７：３０と表示が出ていた。
数秒して
「げっ！遅刻するー！！」
とオレは叫んだ。
急いで着替えを済ませ階段を駆け下りる。
「お袋！！なんでおこさねぇんだ！？」
そう母親の卯月麻弘（うづきまひろ）に問い詰めると
「起こすも起こさないも・・・何度も起こしたのに起きてこないんだもの。」
そういってニッコリと返された。
「今日から新学期なんだから・・・遅れるわけにはいかねーの！」
「そうそうご飯はしっかり食べなさい。」
「・・・・・」
黙ってメシを食べ始めるとお袋はにっこり笑い、自分も食べはじめた。
「そういえば・・・・今年も桜・・・・さかないわね・・・・輝が元気

になってからじゃない？」
オレは内心ドキドキしながら
「昔からあるんだし・・・寿命だろ？」
といって急いで家を出た。

――――――あのころは・・・・オレの命で咲いていたのか？
そんなことを思う。あの桜が咲き乱れるころ、オレを迎えに来るのだろうか？今度こそ連れて行かれてしまうのだろうか？そう思うと少し怖いのになぜあいつに惹かれるのだろう・・・・
「しっかし・・・ウチ以外の桜はキレーに咲いてんなー・・・・」
そう思いふと樹を見つめると木陰に少年がたたずんでいた。
「！！」
あまりにも・・・彼にそっくりだった。
そう考えずには・・・いられなかった。

＊＊＊
「矢波瑛（やなみあきら）といいます。よろしくお願いします。」
そういって挨拶した少年は本当にそっくりだった。
思い出すほどにそう思っていた。
「そーだな・・・・席は・・・卯月の隣な。」
「・・・・！」
焦ったが仕方ない。
ドキン、ドキンと鼓動が高鳴る。
「・・・・よろしく。」
「お、おう・・・・・・」
オレはにこっ、と笑った矢波に安堵と不安の混じった表情でそう返した。
なんか・・・彼じゃないのかも・・・そう思った。
フツーそうか・・・・オレは気にしすぎだよな・・・。
放課後、帰ろうとしてふと上を見上げると桜が咲いていた。

「キレーだな・・・って、おわっ！！」
そういい歩き出そうとしたが、段を踏み外して階段から落ちそうになった。
・・・と、
ドサッ
と誰かが支えてくれた。・・・矢波だった。
「・・・！！・・・・・・矢波・・・・あ、ありがとう。」
「大丈夫？・・・あんまり桜に惹かれないほうがいいよ？――――――あぶないから。」
「――――――――――え？」
おどろいて矢波を見るとクスクスと笑い
「階段から落ちそうになったりするからな？」
といった。
「・・・・このやろー・・・・」
「あははっ！・・・家、どっち？」
笑いながらそうきかれつい、
「2丁目の方だけど？」
といってしまった。すると矢波は
「おんなじっ！一緒に帰らない？」
といってきた。
「・・・・いいよ。」
オレはそういって歩き出した。

＊＊＊
あれからよく・・・というより毎日、矢波はおれと一緒に帰っていた。
「この辺さあ、桜多いよね・・・」
「だろ？」
オレは少し誇らしげだ。
「そんなに桜が好きなのか??」

「うん！」
いや・・・・・でも・・・・・
「でもな、好きなんだけど・・・・」
「・・・・・なんとなく怖い？」
急に冷めた声がした。
「！？」
おどろいて矢波をみると
「桜はきれいだけど・・・咲くそばから散っていく姿が・・・・生まれたときが死の始まりである命に似ている。・・・・・桜が怖いと思うのは・・・桜が死と結びついているから。・・・そんな感じ・・・しない？？」
といった。
笑った顔ははっきり言うと好きだ。しかし猫の目のように入れ替わる表情にクラクラしてしまう。
「・・・・じゃあ、そんなに好きならさ・・・・・一緒に見に行かない？すんげーキレイなところ、しってるけど？」
「・・・・・行く！」
「いろんなところにたくさん咲いているのに・・・・そんなに好きなんだ・・・」
ふわり、と甘い香りと湿った土の交じり合ったにおいがした。・・・桜の香りに似た匂いだ。
思わずドキン、とした。
「好きだけど・・・そこは、怖いところじゃなく優しくてキレイな所かな。」
オレはそういって微笑んだ。矢波は驚いたような顔をしていた。
「見に行こうな！」
オレがそう言うと矢波はにっこりと笑った。

＊＊＊

――――オレ・・・・矢波が好きなのかもしれない・・・・

そう思うようになっていた。
なぜか惹かれてたまらないのだ。
どうする？あいつがあのときの「死神」だったら・・・・・
明日・・・・・確かめよう。桜の樹の下で・・・・・・・

ー翌日ー
桜が咲き乱れていた。すごくキレイだ。
「わぁ・・・・・・・」
そして矢波を振り返る。
「きれいだ・・・・・・・・！！」
そう、やはり矢波は「彼」だったのだ。
表情も・・・・髪型も・・・・全て。
オレは聞いた。
「・・・・・・・・迎えに来たんだろ？？・・・・・・矢波。」
矢波は最初何も言わなかった。オレは続ける。
「おまえだろ！？・・・・１０年前オレを迎えに来た！・・・・・・・また迎えに来たんだろ？」
すると矢波はオレをいきなり桜の幹に押しつけた。
「！？」
「・・・・そうだよ。・・・・・・・迎えに来たよ・・・・輝。・・・・・
お前が欲しい。・・・・もう待ってあげないよ。」
１０年前は振り払えた手。でも、もう・・・・・・・
「さくらが・・・・・すき。だから・・・・・・連れて行って」
オレはそういって微笑んだ。目に涙が浮かんだ。

「オレの命で・・・花は咲くのか？」
そう言いながらオレは蕾のままの木を見つめた。
「・・・・」

矢波は黙ってオレの肩に手を置いて床に押し倒した。
「おわっ！・・・んっ！・・・ンンッ！」
キスをして生気を吸ったのか力が入らない。
「・・・・・・・・さくよ。」
にっこり笑い矢波が顔をどけると美しく桜が咲き乱れてた。
「――――――。」
キレイすぎて言葉が出なかった。
「雪みたい？」
「うん。・・・・・本当によかった・・・・・」
「桜ばっか気にしてるな。・・・・こわくないの？」
矢波がそう問いかけた。オレは微笑み首を横に振った。
「だって・・・・あれはお前だもん・・・あれが咲いてればお前は死なない。」
確かに死ぬのは怖かったが、もう感情が抑えきれなかった。
起き上がって矢波を抱きしめた。
「咲いてろよ・・・・お願いだから死なないで・・・・」
矢波は戸惑いがちにオレを引き離し額にそっと触れてきた。
途端にオレの意識は闇に吸い込まれていった。
「自分が咲いてられれば・・・・・それで良かったのに・・・・・
　そのためなら・・・・・・どんな命がいくつ散ったって・・・・・・
構わなかったのに・・・・・」
矢波はそういって桜の中へ花びらになって消えていった。

「・・・・・・きら！あきら！・・・・・たいへんっ！桜が倒れてる！！」
母親の言葉でオレはバッ、と起き上がった。
「・・・・・・・そ、そんな・・・・・・・・。」
桜がなぎ倒されていた。
オレは泣きながらそこに近づいた。
「！！」
桜の倒された跡に新しい芽が生えていた。
（むかえにいくよ・・・・また、ね）
そう、風の中から声が聞こえた。
「・・・・・・うん。」
オレはその声ににっこりと答えた。

あたりには桜のいい香りが広がっていた。

涙の、うれしいときに流す涙のにおいが。

（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
皆さんの厳しい評価をお待ちしております。
実際友人に読んでもらいました。（ーAー）
「まあ、いいんじゃない？」
だそうです（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6755o/

桜の下の恋

2010年11月12日19時57分発行